

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、3月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（3月）

令和4年2月28日
愛媛県

- 1 気象予報（高松地方气象台）
1か月予報 2月17日発表（2月19日から3月18日）

< 1か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低30並40高30% ほぼ平年並の見込み	少20並40多40% 平年並か多い見込み	少40並40多20% 平年並か少ない見込み

< 予報のポイント >

- ・期間のはじめは気温が低く、期間の後半は気温の変動が大きいです。
- ・低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

2 病害虫の発生予想

かんきつ

(1) かいよう病

令和4年2月28日付け 令和3年度病害虫防除技術情報(第12号)参照

(2) ミカンハダニ

ア 予報の内容

発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、寄生葉率は並、1葉当たりの雌成虫数はやや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや抑制的とみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 12～1月にマシン油乳剤を散布していない園地では、発芽までに散布する。なお、ICボルドー66D散布予定園地では、マシン油乳剤を先に散布し、14日以上間隔をあけてからICボルドー66Dを散布する。

(イ) 樹勢がやや低下した樹では、高度精製マシン油乳剤（97%）を使用する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容

発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査（品種：ヘイワード、18園地）では、枝幹部からの赤褐色の樹液漏出は確認していないが、黄色系品種では確認している。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、今後は剪定部位等からの樹液漏出が発生するとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枝幹や枝の切り口等から樹液の漏出や枯死枝の発生が見込まれるため、園地の見回りにより初発を見逃さない。

(イ) 発生確認後は周辺樹への拡散防止のため、発病部の早期除去を徹底する。伐採基準は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(ウ) 結果母枝の棚付けは確実にを行い、園地の防風対策を強化するなどして、病原菌の侵入口となる枝のすり傷を防止する。

(エ) 管理器具は園地ごとの専用にして、エタノール等で消毒しながら使用する。

(オ) 発芽・展葉期の感染予防としてICボルドー66D 50倍、コサイド3000 2,000倍を発芽前

に必ず散布する。

野菜

(1) ベと病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、1圃場のみの発生であるが多である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的とみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。

(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

(2) ハダニ類 (冬春いちご)

令和3年10月29日付け 病害虫発生予察注意報 (第5号) 参照

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の上昇に伴い密度が増加しやすくなるため、圃場観察して早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。

(3) アブラムシ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察して早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。

(イ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。

(4) コナジラミ類 (冬春トマト、冬春いちご)

ア 予報の内容	<u>発生量：冬春トマト</u>	<u>オンシツコナジラミ</u>	<u>多</u>
		<u>タバココナジラミ</u>	<u>やや少</u>
	<u>冬春いちご</u>	<u>オンシツコナジラミ</u>	<u>並</u>
		<u>タバココナジラミ</u>	<u>並</u>

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、オンシツコナジラミが冬春トマトで1圃場の発生ではあるが多、冬春いちごで並、タバココナジラミが冬春トマトでやや少、冬春いちごで並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。

(イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避けローテーション散布する。

(ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV) を媒介するので発生に注意する。

(5) アザミウマ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 主に花や果実に寄生するので発生が認められたら早めに薬剤散布を行う。
- (イ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。但し、除草によって施設内に飛び込む場合があるので注意する。

(6) ミナミキイロアザミウマ (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 2月上中旬の調査では、並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
- (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避けローテーション散布する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) 本虫はメロン黄化えそウイルス (MY S V) を媒介するので発生に注意する。

(7) 灰色かび病 (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 2月中旬の調査では、冬春トマトでやや少、冬春きゅうりおよび冬春いちごで並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並が多いとされており、発生にやや助長的とみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 日中は可能な限り換気を行い、夜間は暖房温度を上げてハウス内の多湿を防止する。
- (イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 発病果や枯死茎葉は感染源となるので早めに除去する。
- (エ) 発病初期の防除に努める。同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(8) うどんこ病 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 2月上中旬の調査では、葉の発生は並、果実の発生はやや多である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並が多いとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 伝染源となる発病葉、発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。
- (イ) 果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。
- (ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が付着するように丁寧に散布する。
- (エ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(9) 白色疫病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 2月上中旬の定点調査及び県下全域の普通期栽培 (60 圃場) を対象に実施した調査では発生は未確認であるが、早どり品種で一部発生を確認している。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並が多いとされており、発生にやや助長的とみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を十分行い早期発見に努める。
- (イ) 排水不良の圃場で発生が多いため、降雨後の排水に努める。
- (ウ) 発病葉や枯死した葉は感染源となるので、適切に処分する。
- (エ) 本病原菌は水媒伝染するため降雨前後の防除が重要となる。
- (オ) 発病初期の防除に努め、薬剤は同一系統の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (カ) たまねぎの葉は薬剤の付着性が悪いため、展着剤を必ず加用し丁寧に散布する。

(10) べと病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の定点調査では、1圃場のみの発生である。

(イ) 県下全域の普通期栽培を対象に調査した結果、東中予での発生は認められなかったが、南予では発生圃場率が平年並であり、発病株率は低い(表)。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的とみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 越年罹病株(葉の黄化・色あせ、草丈が小さく葉身にビロード状の灰褐色の分生子(粉)が付着した株)は見つけ次第早期に抜き取り処分する。

(イ) 早生種では、球の肥大期になると葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察をして発病初期からの防除を行う。

(ウ) 気温が15℃以上で曇雨天が続くと多発しやすいので防除が手遅れにならないよう注意する。

表 たまねぎ(普通期)におけるべと病の発生調査結果

地域	調査圃場数	発生圃場数	発生圃場率(%)		平均発病株率(%)	
			R4.2	平年	R4.2	平年
東予	22	0	0.0	6.8	0.00	0.41
中予	18	0	0.0	2.5	0.00	0.04
南予	20	2	10.0	9.3	0.15	0.96
県全体	60	2	3.3	5.9	0.05	0.40

平年：H29～R3

【病害虫発生予察情報】

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは

<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。